

文化団体等ヒアリング結果

ヒアリング調査実施概要

《調査目的》

文化芸術に携わる市民のニーズを把握し、具体の施策の検討に生かすこと

《調査時期》

令和4年10月～

《協力をいただいた文化団体等》

以下「ヒアリング実施団体」のとおり

「楽都」「劇都」関連の文化団体へのヒアリング

市内で活動している「楽都」「劇都」関連の文化団体等に対し、市の文化施策に求めることや、活動に際しての課題などについてヒアリングを行った。ヒアリングの実施団体、主なご意見は以下のとおり。

【ヒアリング実施団体】

宮城県合唱連盟、宮城県吹奏楽連盟、(一社) 仙台オペラ協会、仙台吹奏楽団、(一財) SCS ミュージカル研究所、仙台市民交響楽団、仙台ニューフィルハーモニー管弦楽団、演劇関係者(公募により参加19名)

【主なご意見】

(提案・要望・今後の展望など)

- ① 県外の人と話をすると、仙台は「楽都」「劇都」と文化的なイメージを持たれていると感じる。
- ② 仙台藩的なアプローチ、外国でいう、「グレーター」のような文化圏、経済圏の考え方が有効ではないか。周辺と連携し、それぞれの得意なコンテンツを出し合って一つのものを作ったり、事業費も分担したりして、面白いことができるのではないか。
- ③ 「ことば」「方言」はとても大切だと思う。消えてしまったら復元できないし、仙台オリジナルにつながるものなのではないか。
- ④ オペラの公演を継続していくためには、お金が非常にかかる。チケットノルマも大変。助成金はぜひ継続して頑張ってもらいたい。
- ⑤ オペラ公演を続けているのは東北では仙台ぐらい。東北の他県のお客さんが公演を聞きに来てくれることもあるので、東北各地の人材とも協力しながら、東北6県からお客さんを迎えるような公演を行って、仙台のオペラを盛り上げていきたい。
- ⑥ アマチュアの公演の入場料は市の施設の料金形態に依存するところがある。チケット代を上げたくても、価格を高くすることでホール使用料が高額となることから、何十年も据え置きというのが現状。
- ⑦ アマチュアの活動を、支援をしつつもっと市の文化施策に生かしてほしい。年に1度、JA0

- (日本アマチュアオーケストラ連盟)の加盟団体が持ち回りで幹事をつとめ、「全国アマチュアオーケストラフェスティバル」が行われている。大がかりなものであり、それにふさわしい施設も必要だが、何より行政のバックアップがなければできないもの。実施することはシティセールスにもなるし、オケのメンバーはお金を使うので、市にも還元ができるはず。
- ⑧他市では文化芸術都市のPRを積極的に行っているところもある。仙台は目に見えたPRが少ない。もっと示すことでより中身にも市民の気持ちに向いてくるのではないか。
 - ⑨「劇都仙台」を掲げているにも関わらず、楽都にばかり意識が向いているように感じられる。
 - ⑩仙台には発祥のものが多く、新たなものが生まれる土壌がある。
 - ⑪クラシックやオペラ、バレエなどは客離れが進んでおり、今後はありとあらゆる文化芸術の分野と連携していかないと新たな顧客の獲得は難しい。次の世代の市民にどんな芸術に触れてほしいのかを、文化芸術推進基本計画も含めて考えていく必要がある。
 - ⑫表現の自由や人権問題などを吸収するような劇場法が諸外国から大きく遅れながら制定され、やっと仙台市も計画の策定に動き出した。10-BOXを立ち上げて以来、演劇が世の中に必要なものだとすることを世間に伝える方法をずっと考えてきたがとても難しかった。それがこの計画の策定により、形になろうとしている。
 - ⑬文化芸術推進基本計画が目指すものは、演劇が教育や福祉、医療などのあらゆる社会のジャンルとコネクしていくということを考えていく必要がある。
 - ⑭新たな複合施設の活動を考えるうえで、震災後に始まった「芸術飛行船」(文化芸術による子供の育成事業－芸術家派遣事業)の存在がひとつのモデルになると考える。今後、国の補助金が継続できる保証はないため、複合施設のプレ事業として市の予算で継続していくことが望ましい。国の予算を切られた程度で芸術飛行船ができなくなるようでは、あれだけの災害を経験して10年が経過したのに何も学ばなかったのか、という話になる。

(活動の場に関すること)

- ①練習場所の確保に苦勞している。本番前の会場を使った練習ができず、別会場で部分的な合わせだけを行うこともある。
- ②市内の会場がとれないことも多いので、岩沼、美郷、名取などに遠征することもある。
- ③イベント業者が大量に申し込んでくるため、市民団体の施設利用が大変困難である。
- ④プロモーターとの競争になるため、人数で負けてしまう。施設利用は市民団体を優先してほしい。
- ⑤宮城県は大きな会場がなく、これまで全国大会の誘致に手を挙げられなかった。
- ⑥石巻では、まきあーとテラスができてから、たくさんの行事が企画され、足を運ぶ人も増えた。それにより、地元民の意識が変わってきた。これまで文化にあまり触れてこなかった人たちも、当初はホール整備に否定的であったが、触れてみると「良いものだ」と感じている。
- ⑦金沢の文化施設(金沢市民芸術村)は、24時間利用可能な施設であると聞いた。若い人の中には、仕事終わりの夜間に活動したいと思う人もいると思う。施設の開館時間が、市民の文化芸術活動の活発さなどに寄与しているところがあるのではないかと感じた。
- ⑧施設を運用する人たちがみんな利用者に寄り添ってくれると嬉しい。ノウハウを教えてくれたり面倒を見てくれたりする人がいてくれると信頼が持て、若手も安心して参入できる。
- ⑨仙台には文学館や美術館など様々な文化施設があるが、連携がなされていないように思えるのが残念である。計画の中で施設間連携を打ち出す方が良いのではないか。

(活動のきっかけ・人材について)

- ①子どものコミュニケーション能力等を心配する保護者の不安が元で教室に通い始める子どももいる。メソッドが確立できている訳ではないが、自閉症気味の子どもが最初の半年は輪に入れなかったが、1年後には最前列で活動をしていたりする。非日常的な活動をすることによる「演劇的なセラピー」と言えるかもしれない。
- ②若いプレイヤーが仙台の外に出て、研鑽を積んだ後、戻る場がない。彼らが仙台に残っても有意義な活動、学びを得られる環境が必要。
- ③大学でのオペラの授業がきっかけでオペラにはまり、教員となった今もオペラに携わっており、教育の現場でも、学芸会などの際に子どもたちに自分が学んだことを還元することができている。
- ④総じて合唱人口は高齢化・少人数化の傾向にある。学校団体も50人以下に減ってきている。
- ⑤(芸術家派遣事業などの)活動をする上で重要なコーディネーターは仙台市で雇用して安定した活動をし、震災以降の活動を継承しながら、有事のフェイズにいつでも応えられる体制が根付かせることが必要である。

(子どもたちの文化芸術活動について)

- ①小中学校や子供にスポットを当て、芸術家の派遣による教育などについて推進基本計画に明記してはどうか。
- ②石巻市遊学館(400席規模の多目的ホール等がある施設)にピアノを導入する際、子供たちのためにと説得して予算をつけてもらい、スタインウェイのピアノを導入した。子供達には本物に触れる機会を与えたい。
- ③公立の中学・高校の楽器はおそらく20~30年物が多いと思われる。今後、部活動が学校から切り離されるとそれらの楽器が更新されなくなるのではないかと。個人で持つにも所得格差でやれない子供たちが増えてくるのではないかと。完全に切り離すのは現実的ではない。
- ④俳優を職業にできるのはほんの一握りであり、プロの俳優を養成するだけの場所という意識は持っていない。子どもたちと一緒に育ち、生きていくうえで軸になるものをそれぞれが見つける場所にしたい、それを共有できる場でありたい、という思いで活動している。その意味で、私たちの活動は子どもの育成と同義だと思う。
- ⑤子どもたちの地域への誇りを養いたいという思いで、オリジナルの作品づくりにこだわっている。

伝統文化・文化財関連の文化団体へのヒアリング

市内で活動している伝統文化・文化財関連の文化団体等に対し、市の文化施策に求めることや、活動に際しての課題などについてヒアリングを行った。ヒアリングの実施団体、主なご意見は以下のとおり。

【ヒアリング実施団体】

仙台市能楽振興協会、一般財団法人秋保教育文化振興会、秋保の田植踊保存会、文化財サポーター会

【主なご意見】

(提案・要望・今後の展望など)

- ① 計画をつくることで、文化芸術に対する市民意識の向上をはかることはよいことだが、そこにとどまらず予算の確保につながるものにしてほしい。
- ② 外国人は能について日本人以上に知っている人も多く、また興味を持つ人も多い。「文化を知る」ということには、観光の面でも需要があると思う。
- ③ 仙台市は仙台藩ゆかりの歴史的な土台があるのだから、もっとそれを活かすべき。
- ④ 仙台では能の流派が五派揃っており、流派を超えて一体で活動していることが強みであり特徴。
- ⑤ 能がただ「観る」だけのものになっていることが残念。もう少し日常のものになってほしい。
- ⑥ 計画の策定にあたっては、仙台特有の、文化芸術とは何か、仙台らしさとは何か、ということを考えるべき。
- ⑦ 民俗芸能の保存活動に対して、ただの趣味、あるいは好きな人がやっているだけと思われることがあり、周囲の理解不足を感じる。
- ⑧ 近年、ガイド系団体では、講座・勉強会には来るが、実際のガイド活動には来ない人が増えており、課題となっている。
- ⑨ 遠征して他都市・他地域での活動・発表が実施できると、子どもたちの意欲も高まり、民俗芸能に参加したい子どもたちが増えるのではないかと。
- ⑩ 歌舞伎にスーパー歌舞伎があるように、スーパー田植踊ができないかと考えている。唄や笛のほかに、ギターを入れたり、オーケストラで1演目やってみるなど、伝統も大切にしながら新しい取り組みをすることで、田植踊に参加するきっかけや興味の醸成につながるのではないかと。
- ⑪ これまで部会（勉強会）活動が中心であった文化財サポーター会では、今後、新たにガイド活動の実施に向けて動いている。負担感が増す側面もあるが、どのような準備が必要か検討中である。
- ⑫ 文化財サポーター会の部会活動がこれまで平日であったこともあり、サポーター養成講座修了後、入会しない（できない）方が多くなっていたが、土日に活動する養成講座パート2を今年度から実施する予定としている。運営サイドの労力・負担が増える面もあるが、入会者増に努めている。
- ⑬ 活動参加者の間口を広げたいと考えているが、参加者が多様化すると今度は民俗芸能のなりたちや本来の趣旨、伝統などが薄れていく可能性がある。文化財としての芯は保ちながら、どのように参加者・後継者を増やし、活動を維持・拡大させていくか難しい面もある。
- ⑭ 秋保教育文化振興会では、従来から秋保の民俗芸能団体や文化サークル、区民まつり等に助

成を行ってきたが、今後は秋保の内外を問わず民俗芸能に参加したい子どもたちの送迎問題を少しでも解消するため、バスの往復交通費を助成する取り組みを検討中である。

(活動の場に関すること)

- ① 身近にあること、触れる機会があることが大切である。能楽堂があれば、身近に接する機会やチャンスにつながる。
- ② 仙台市中心部の市民会館、県民会館、電力ホールはいずれも老朽化しているが、いずれの会場も古典芸能で多く使用している。そういった活動を補完する場の検討が今後必要。
- ③ 田植踊の伝承活動にあたり地域の集会場といった共有スペースを使っているが、自分たちだけの専用スペースがあるわけではないので、道具の保管場所が足りない。同じ地域で田植踊に加えて神楽もやっている場合には道具類はさらに増え、ますますスペース的に厳しい。
- ④ 民俗芸能の練習場所にエアコンがないので夏場の練習環境が課題。熱中症になると大変なため、そうしたケアには気を遣っている。
- ⑤ 文化財サポーター会の部会活動(勉強会)の会場は、市民センターや戦災復興記念館の会議室等を予約して使ってきたが、史跡陸奥国分寺・尼寺ガイダンス施設内の学習室が新たにできたことで、無料であるうえに会場が確保しやすくなり、大変よかった。

(人材について)

- ① 「囃子」は四種類の楽器からなるが、高齢化も進み、仙台にはそのうち2つしか人材が残っていない。残り2つの楽器については地元の人材が失われてしまい、大変惜しい。
- ② 踊り手だけでなく指導者側にも後継者問題がある。踊りをよく理解していないと指導できないが、詳しい人が少なく、バトンをどう渡すかが難しい。指導者の育成も課題である。

(子どもたちの文化芸術活動について)

- ① 子どもの能楽体験を考えるときは、見やすい環境づくりが肝要。(集中して見たい大人と集中力の続かない子どもが同じ空間で鑑賞することは難しい。)
- ② 子どもの能楽体験に携わる中で印象に残った出来事が3つある。1点目は小学校の講座で2回能楽体験をした子供が、高校2年生のときに、わざわざ福島から能-BOXのイベントに来たということ。2点目は4歳の子どもが親と一緒に個人の教室に来た際に、一緒にいるだけで謡を覚えてしまったこと。3点目は宗家の公演でプレ講座を行った際に子どもから「本物は凄い。宗家はギアが入ると凄みのある美しさを見せる」という感想をもらったこと。
- ③ 仙台は学校で日本文化を紹介する教育を行わないので、日本文化の素養がなく、触れるチャンスがない。計画を作るにあたっては、教育委員会、学校の理解はどのくらい得られるのか。
- ④ 小学生に「囃子」の面白さを伝えていきたいと思い、数年前に講座を行っていたが、受講した後が続かない。
- ⑤ 民俗芸能の活動参加者に小学生は比較的多いが、中学生・高校生が少ない。たとえば、田植踊の早乙女は、本当は中・高生がイメージに合っているが、部活など、さまざまな理由で活動に参加できないことが多い。
- ⑥ 子どもたちの送迎に対応できない、あるいは送迎への負担が大きいため、民俗芸能の活動に参加できないという声がある。

文化芸術による社会包摂に取り組む団体へのヒアリング

障害者の文化芸術活動支援など、文化芸術による社会包摂に取り組む市民や団体の代表者らのヒアリングを実施した。ヒアリングの実施団体、主なご意見は以下のとおり。

【ヒアリング実施団体】

- ・NPO 法人エイブル・アート・ジャパン ・NPO 法人 ARTS for HOPE ・PLAY ART! せんだい
- ・NPO 法人アートワークショップすんぷちよ ・(一社) アート・インクルージョン
- ・ARCT ・NPO 法人アイサポート仙台

【主なご意見】

(アクセス・周知)

- ①周知といったときには、「障害を持っている人への周知（文化イベント等へのアクセスの保障）」と「障害を持っていない人への周知（障害への理解）」の二種類がある。
- ②どの障害でも同じだが、障害というものを知らない人が多い。外から分かりやすい障害だけではなく多様な障害のある人がいるのだという意識をまずは持ってもらう必要がある。それがベースとなる。
- ③「障害者」がいるのではなく、〇〇さんの上にちょこんと「障害」が乗っている状態ととらえてほしい。「障害者」という言葉がその人をおおいかくさないように。
- ④文化事業について、障害のある人たちの元に情報すら行き渡っていない状況。そもそも参加ができるものと思っておらず、無関心に陥っているのが現状ではないか。
- ⑤「障害者による文化芸術活動の推進に関する実施状況調査（文化庁：令和5年3月）」によると、障害のある方の文化芸術活動に関わる団体に、障害者の文化芸術活動に関わる法律や計画を提示し、団体内で周知されているかを尋ねたところ、法律や計画いずれかの「周知を行っている」団体は 27.8%、「（法律や計画を）知らない・（周知をおこなっているかどうか）わからない」が 72.2%となっている。関わりのある団体ですら、大前提が現場レベルまで認知できていない現状がある。
- ⑥障害のある方もない方も共に参加するイベントの際に、障害のある方の感想として多く聞かれたのが「一般の人と一緒にできて楽しかった」というものだった。障害のある方のまちな出る機会が、福祉のサービス事業に限らず、一人の人間として、文化やスポーツに触れ、楽しさを通じて、わくわくしたり様々なことを学んだりする場にも開かれるということが計画の前提にあるとよい。

(アウトリーチ・文化芸術との出会い)

- ①文化芸術に出会うことが、一生に一回もない方も多いと思う。子どもを対象としたアウトリーチや芸術鑑賞会はとても大切な機会。その貴重さへの認識をちゃんと持つ必要がある。
- ②「なりゆきで文化芸術に出会う環境」が大切。なりゆきで出会うことが、その子の一生の芸術体験を決めるかもしれない。それが仕組みになっているというのが、文化行政の果たす役割に入っていることが求められていると思う。
- ③様々な施設にアウトリーチで訪れて感じたことは、文化芸術の利点として、対象（例：子供など）だけではなくて、周辺にいる施設の職員（例：先生など）にも違う視点や価値観を提

示できるということ。

- ④図書館でも保育所でも、どこにいてもアーティストがいるという環境が理想。そうすることで文化芸術が身近になっていく。
- ⑤自分たちのスキルが役に立つと思っていなかったアーティストたちが、芸術家派遣事業を通じて「ありがとう」と感謝されるようになった。自分の活動が必要なことや価値のあることなのだ気づいた方たちが今も活動を続けている。何か事業を1つつくることが、アーティストが開眼するきっかけにもなる。
- ⑥アウトリーチ先について、まずは小学校や保育所、と考えてしまうが、実はもっとたくさんあり、それぞれの施設にしかつながらない人たちがいて、届けなければ一生アートに出会えない人もたくさんいるということを認識する必要がある。文化庁は小学校以上と言っているが、その届け先を誰もが分かる形で独自に定義することが、仙台モデルになるかもしれない。

(コーディネーター・人材)

- ①「アート=多様な価値観」だと思っており、多様な価値観を通訳するコーディネーターが必要で、その育成に力をいれるべきだと考えている。また、文化政策の中で「コーディネーター」をとらえなおすことが必要。そのうえで人に予算をつけることが可能になる。
- ②これからの社会課題は一団団で解決するのは困難。今後、コーディネーターの勉強会を行ってみてはどうか。人モノカネの資源が乏しくなるこれからの時代、社会課題の解決をしていくためには、分野を超えた協働が不可欠。文化芸術と地域社会を掛け合わせた事業展開をしていくためには、分野を超えた協働をコーディネートする人材が必要。
- ③広く意見を聞くほど、我々のような社会包摂の考え方、コーディネーターが大切という考え方はマイノリティであり、埋もれてしまう。強く発信していかないといけない。
- ④コーディネーターは、今行われている活動にはこんな意味があるのだという「通訳」を担い、そのことを通じて周辺の施設の職員の方々の意識を変えることができる。
- ⑤助成金を配分する形とは別の、アーティストに創造性やクリエイティビティを提案してもらう形、事業に在仙のアーティストを活用する形があるとよい（フリーランスのアーティストには助成金申請等に伴う一連の労務管理のスキルが不足している）。在仙のアーティストをもっと活躍させるという視点があれば、東京に行かずに仙台に立ち止まるのではないか。
- ⑥ハードがあっても、人に対してお金を出していかないと何も始まらないのではないか。モノができて、それを支える人がいなくなってしまうのではないか。
- ⑦西日本のある地域では、「芸術士」という資格を設け、芸術士として登録しているアーティストを市が希望するところへ派遣するという仕組みがつくられている。

(支え手の現状・資金・予算)

- ①文化庁の助成金等は単年度の予算であり、申請しなければゼロ。国の事業を受託しても仕事の実入りよりも生活費が上回り、収益はあがらない。
- ②ファシリテーターやコーディネーターが、単年度ではなく、この先何年も、子どもたちの教育や福祉などの面で必要な仕事なのだという確固たる仕組みがあれば、目指してみようかなと思うアーティストが生まれるかもしれない。しかし、それを自分たちで開拓してもなお、生活できるレベルにまで到達できないというのが現状。
- ③収入を得るために文化庁の単年度の助成事業にエントリーして、パンク寸前で事業を回して

いる、というのがどこの団体も直面している現実。

- ④明らかにこの10年、新しい領域や障害のある方の文化芸術活動、共生社会づくりという業務が増えてきているという現状がある。全体を見直したうえでの予算の配分という視点を持ってほしい。
- ⑤仙台市が企業のメセナ活動の投資先を社会包摂の分野へ向けるために、リーダーシップを發揮するようなキャンペーンなどがあるとよいのではないか。
- ⑥皆さんの成功例をどんどん発信していく必要がある。アートにはこんな効果がある、ということ PR していければ、そこにお金を投資してもらえるようになるだろうか。

(場について)

- ①青文のパフォーマンス広場は素晴らしい場所であると感じているが、密度が高い。アマチュアもプロも気軽に練習でき、育っていくような場所を、若い音楽家、アーティストを育てるという視点から充実させる必要があるのではないか。
- ②施設の予約を受け付けるだけでなく、スケジュールや施設の利用の仕方、あるいは企画についても相談にのってくれるような、一緒に何かをつくっていく施設運営が理想。
- ③障害のある子どもたちにとって、文化施設は威圧感があって入りにくいことがある。安心できる居場所とするためには配慮や工夫が必要。(常に障害のある人によるアート等が展示されていて、自分たちの居場所であると認識できるような空間があることなど)
- ④公共施設には障害のある人への理解のある人を配置する必要がある。そうすると、障害のある人も施設の職員に相談がしやすくなる。

(その他)

- ①「文化芸術の力」の中身を、仙台の様々な活動団体や、ステークホルダーと共に豊かに構想する場が必要。文化芸術と社会をどう掛け合わせていくか、検討を重ねる場をつくってほしい。
- ②広義の意味のアート、生活文化の視点やアーカイブなど含め、さらに広いステークホルダーと対話を重ね、仙台の地の文化芸術を考えていく営みがこれから必要と考える。
- ③文化活動団体と行政の定期的な情報共有・アイディアシェアリングの場など、連携して活動に取り組むスキームをつくってほしい。
- ④2011年以降、Uターン組が非常に増え、様々な活動が行われているが、課題を話し合ったりする座組みがなかなか作られない。情報交換や連絡会議のような、ネットワークの醸成を行うことが仙台の課題ではないか。そのつなぎ目をつくることについて、大きな公共の力を投じていく必要があると感じている。
- ⑤音楽であれ演劇であれ、それらを通じてその人の日常をいかに豊かにできるか、文化芸術のソフトの力を、人がよりよく生きるためにいかに使うか、というように文化芸術が技術として語られている。仙台にあるいじめの課題、引きこもりの課題、災害以後の生活困窮など、様々な課題に直結していけるはずだと思う。
- ⑥在仙アーティストの方々には、どこに行くと出会うことができるのか。ぜひアーティストの方に来ていただきたい、と思ってもどこに頼めばよいのかが分からない。人材派遣やコンサートの機会など、文化芸術に関する相談ができるワンストップの窓口があると良い。
- ⑦山形県鶴岡市にある共生型の遊戯施設キッズドームソライには様々な機能があるが、その一

つとして、イタリアのレッジョ・エミリア市の取り組みを模倣し、倉庫に様々な素材を細かく分けして置いたり、また自由に子どもたちが創作する場を設けたりしている。キッズドームソライに出資しているのは全て民間の企業であり、その辺りも含めとても先駆的だと感じる。

- ⑧シカゴ公共図書館には、教育格差の是正のために始まった、つながりの学習と言うものがあり、アーティストが常駐している。日々施設に来る方へ、文化芸術の力を持ったアーティストたちが伴走して教育に携わり、生きる力を養っている。
- ⑨これからは、経済を活性化するためにクリエイティブな力を活用するという派手なことよりも、もっと大事なものを大切にしていく文化の方が、仙台市のシティプロモーションに近い気がする。
- ⑩アートはその人がその人らしくいる、人権の回復にも効果を発揮する。
- ⑪文化芸術は評価が難しいと感じているが、1つだけでもよいので、定点観測ができるような事業があると良い。評価の際に、「相互行為分析」というやり方もある。「上手」=「良い」ではない評価が大切。
- ⑫計画策定のプロセスが、コーディネーターやアーティストを育てる機会になっているのではないかと感じている。機会が多ければ多いほど、関わる人が多いほど、そうした人たちに当事者意識が生まれるのではないか。